
全体セッションの概要

コーディネーター 加々美光行

全体セッションは中国学の方法論の革新を共通の課題として、主に以下の4つの論点をめぐって激しい論争が戦わされた。

第1の論点は、溝口雄三教授が基調報告の中で提起したもので、東方と西方の東西関係に力点を置いた空間軸（横帯）と伝統・現代・未来の歴史関係に力点を置いた時間軸（縦帯）の二つの軸をめぐり方法論の問題。溝口教授は過去サイドやコーエンによって方法論の歪みとして提起されたオリエンタリズム（西方中心主義）は、従来の方法論が東西関係の空間軸（ウェスタンインパクト）に重点を置いたため、歴史関係の時間軸が軽視されてきたことに由来するとし、方法論の革新のためには今後、歴史時間軸への重点移動が求められるとした。

これに対して周長城教授はオリエンタリズムが歴史軸の横帯から克服されるのは当然としても、空間軸は単に東西関係に止まるものではなく、一般に文化比較、体制比較など比較論の観点から重要性を持ち、比較論からは歴史学にとどまらず学科横断的総合的な方法論の必要性が提起されるとした。

宇野重昭教授は溝口教授の言う縦帯、横帯を、伝統と外来の関係性としてとらえ直し、伝統の内発性によって外来的要素を内在化する内発論こそが方法的に重要になるとした。ただしその場合、伝統と外来のぶつかり合いは異質性の衝突にほかならず、そこに生じる可能性をいかに普遍的用語で解釈し直すかが方法的に問われてくるとした。

第2の論点は、大量化した情報資料の選択性をめぐり方法論を問うもので、溝口教授がE.H.カーを引いて歴史評価をめぐり問題として提起し、それを受けて金観涛教授と劉新教授の論争を引き起こした。金教授は現在のIT先端技術の高度化によるグローバリゼーションの進展によって情報のデータベース化が時代横断的、国境横断的に進展し、情報の透明化と大量化が生じたとし、この変化によって溝口教授のいう歴史時間軸への重点移行が容易になったとした。そのうえで従来中国学（金教授は漢学の語を用いた）の周辺分野であった思想史こそが、過去、現在、未来の歴史的諸概念を検証可能なものとして相互に連結する縦帯重視の方法論を生み出すとした。

これに対し、劉新教授は、溝口教授が歴史評価において研究者が「歴史に参加する」必要性を強調した点を人類学的視角、あるいは日常生活の視角から問題とした。劉教授によれば金教授が指摘したIT技術の高度化によるグローバリゼーションの進展は、むしろ情報資料が大量化する一方、その大量性に埋もれるかたちで情報の深度（deepness）が低められることとなるが、そうした条件下でマクロ的方法である思想史的視角から資料を認識す

ることは、むしろ「歴史への参加」を曖昧化するとした。例えば湾岸戦争が戦争として発生したのかどうかをめぐって、フランスの一哲学者が戦争は発生しなかったと幻のような結論を下したことなどにその点が見られるとした。こうした弊害を克服するには、むしろミクロな日常生活に視角を据える方法が必要となるとした。また IT 技術の高度化によって大量化した情報の問題は、研究者がいかなる情報を選択するかの振幅を拡大させることによって、歴史評価の不確定性を高める結果になっており、方法論的には楽観論は許されないとした。

第3の論点は、以上の認識論に方法論の力点を置いた問題提起に対して、存在論に着目する論点の必要性を問うもの。主に劉新教授によって提起された。劉新教授は人類学的な視角から現在の IT・先端技術の高度化によって全地球規模で人々が日常生活を共同共有化するというかつてない一大変化が生じていることを強調する。この問題はひとり中国の問題ではなく、人類全体の基本的生活に歴史を画する経験の変化がおきたことに由来するのであり、一般的な歴史過程による変化とは全く異なる歴史の不連続性すなわち革命的变化によって惹起されたとした。しかもこうした日常生活の存在論的激変は、現に中国の国家と民衆社会の関係性にも大きな変化をもたらしているとした。この点で歴史認識論に力点を置く溝口教授、金観涛教授が前提する歴史連続性の論点では現下の存在論的な激変は捉えきれないとし、新たな方法論が求められているとした。

第4の論点は、地域研究の一環としての中国学に方法論上の難題をみるもので、主にマドソン教授とマククリーン教授、周長城教授、宇野重昭教授によって提起された。

まずマドソン教授は冷戦論理の下で国民国家を単位とする国際秩序観が西欧世界において支配的だったことから、冷戦期までの研究者の中国観は、中国を統合された国民国家と見なす観点が強かったという。しかし冷戦終焉後は中国の現実が多様な民族地域の存在や、先進地域、発展途上地域、貧困地域などの地域差などから構成されていて、極めて多様多面的であるとの認識が強まった。しかし中国学がなお地域研究 (area studies) としてなされている現状下では、「地域」概念が統合された全体としての特定の地理的地域と理解されるため、多様性多元性に満ちた中国を「地域」概念を用いて扱うことがいよいよ不適切になっている点に問題があるとした。そのうえでむしろ大量の異質な諸要素が共存する場所を全体として理解し得る新しい概念が必要であり、その意味で新しい方法論が今後は採られるべきであると論じた。その場合、大量の異質な要素を全体として理解するには、金観涛教授が示唆したように今日細分化傾向を強める中国学の各分野を全体としてとらえ直す方法が求められているとした。

マククリーン教授は、地域研究としての中国学が持つ難題は、なによりも外国人研究者が中国学に携わる場合に生じる認識の歪みについて強調した。まず外国人は外部者としての自身の視角から他者としての中国を見るのであり、その視覚の歪みは当然に不可避的に生じる。とくに中国学の研究が一定の基金によって支えられている場合には、その基金が持つ動機、目的によって左右されやすく、そこに一定の認識の歪みを発生させる要因もある

とした。さらに中国の現実がマドソン教授の言うように多様多元的であるのに対して、外国人研究者はしばしばマクロ分析の方法から統一単一的な概念を用いて分析する方法を免れず、そこにも方法論上の問題があるとした。

周長城教授は、まず対象が多様性多元性に満ちている中国学は、マクロ的視角からのみ分析するのではなく、劉新教授の主張するように日常生活にまで視角を落として中国的現実にも密着することが方法的に必要なものとした。一方、金観涛教授と劉新教授の認識論をめぐる違いは、金教授がマクロ的な思想史的方法を採るのに対して、劉新教授がミクロ的な人類学的方法を採ることに由来するとし、それはすなわち中国学の学問分野間の方法論の違いにほかならないとした。その上でマドソン教授の言うようにそうした方法論上の違いを超えて学問分野横断的な新しい総合的な方法論が模索されるべきだとした。

宇野重昭教授は地域研究で社会諸科学の学問横断的な総合化が必要であることは早くから認識されてきており、古くて新しい議論だとし、現実には総合化の道筋は、今日に至るまで見いだされていないとした。

以上縦帯、横帯の問題、大量化する資料選択の視角の問題、IT技術高度化による地球規模での人々の日常生活の激変という存在論の問題、地域研究の学問横断的な総合化による革新の問題の4つの論点に関して、コーディネーターの加々美教授は方法論上の説明責任(accountability)の問題に要約して次のように指摘した。

まず加々美教授は中国学が外国研究としてなされる場合と、中国人研究者が自国研究として行う場合では方法的に異なることを強調した。いかなる学問も目的を離れては存立し得ないが、一般にその目的はその学問が対象とする領野の現状を改革することに置かれている。この点はマックス・ヴェーバー(Max Weber)が価値自由性の問題を議論した際、強調した点にほかならない。学問がそうした目的を持つことによって、当然にも研究者の主観が混入し、認識上の誤りが生じることは避けがたい。中国学の場合には中国の歴史、社会、政治、経済などの認識評価を改めることによって対象としての中国を変革することを目的とすることになる。その場合、中国人研究者が自国研究として行う中国学が中国を変革することを目的とするケースでは、歴史の曲解あるいは社会的現実の曲解があれば、それによって不利益をこうむる中国の人々からの研究に対する批判が返ってくることで、当然に研究者の説明責任が求められる。またその過程で研究者の主観に発する認識の誤りが修正を受け、研究の実証性が高まるということにもなる。ところが外国人研究者が外国研究として中国学に従事する場合には、そこに事実からの逸脱や曲解が生じて、それによって不利益をこうむる可能性のある中国の人々は、その研究の成果を目にし耳にする機会が圧倒的に乏しく、それゆえ研究に対する批判も生じにくい、その結果、研究者に説明責任を求められることがほとんどない。したがって実証性を高める保障が存在しないことになる。地域研究が不可避的に抱えてきたこのような方法的欠陥を克服するためにこそ、中国学の方法をめぐって自国研究と外国研究の異なる視角が相交わる持続的な学問的対話

の重要性が増大するとした。

4つの論点はいずれも深く相互に関連し合っているが、学問分野の多元性、中国という対象が有する多元性の両方を包摂して、分野横断的、国境横断的な学問対話による総合の学としての中国学を新たに確立することが必要とする点が、全体セッションの共通課題として確認された。